

おじさんの青春日記 ～その3～

『まえがき』にかえて

			清				
			職				

「おじさんの青春日記」は合間を見つけてワープロに書き蓄えた数行のフレーズを、連休や夏休みのまとまった休日に編集し、推敲（すいこう）する作業のなかで出来上がっていく。

日常の体験や思いを幾種かの引き出しに分別しながら、言葉の森を散策できる、もっとも楽しいひとときでもある。

経済環境の変動に次ぐ変動のなかで、昨年の私の仕事はフーフーと息づかいを荒くしながら、日々発生する事件の後を追って走ることに精一杯だった。

日本列島を北から南。私は大都會のオフィスビルから、田園のなかにポツンとたたずむ工場まで訪ね歩く。そこでさまざまな人との新しい出会いが生まれる。

新規な価値や技術を発想して図面化する仕事。五感と体のすべてを使って物を造り上げる仕事。交渉のなかで生まれる多くの約束事を実行する仕事。

そこには仕事を通じた交流のなかで見ることが出来ない、男たちの姿がある。私は今そのまっただ中にいる。

今回の「おじさんの青春日記 その3」は文芸を離れて、戦後日本の数十年にわたる経済状況が停まり、恐慌に近い現在の状況のなかにいて、いくつかビジネスにまつわるストーリーを書いてみたいと思う。

市井（しせい）に極くありふれた存在で、赫々（かつかく）とした経歴も持たないけれど、自分の職に誇りをもって働く男たち。

きょうより明日、と自分を鼓舞し、虚勢を張らず、権威に迎合することもない。淡々と、自分の歩みを刻々大切に生きようとする人たち。

新聞紙上を賑わす『汚職』者に対して、私はその人達の仕事ぶりを『清職』と呼びたいと思う。

『清職』者は決して寓話（ぐうわ）の世界の人々ではなく、目立ちはないけど、我々の身のまわりに確実に、無数に存在する。

たとえ日本が金融や経済で破綻することがあっても、彼らがいる限り、その精神において日本は破綻しない。

本編に登場する男たちを父や夫に持つ人たちよ。あなた方の父親や夫や兄弟が、その仕事を通じて、少なくとも一人の人間に忘れられることのない感銘を与えたことを知れ。そして、そのあとに続け。

*

父が遺した工場の事業転換に四苦八苦していた私が、二十代の頃のこと。

銀行のS支店長に二百万円の融資を申し込んだことがある。初老のその支店長は噂ではいわゆる出世コースからは外れた存在で、この支店を最後に定年を迎えるだろうとのこと。

応接室でのしばらくの雑談のあと、S支店長は切り出した。

「融資の申込書は拝見しました。ご計画中の製品は確かによく研究された、いい製品だと思います。しかし、販売の見通しの方はどうなんでしょうか？」

「製品には自信があるんです。見てもらった企業の担当者も誉めてくれますし、売り先の方もいま、手をつくして開拓しているところで、二、三の商社から声をかけてもらっています」

私は何枚かの図案をテーブルに広げ、支店長に言葉を返した。

「しかし、まだ注文書を受け取るまでには話は進んでいないわけですね？」

笑みを浮かべながらも、S支店長は鋭く切り込んでくる。

「支店長、新製品というのは市場に出してみないと本当に分からないものなんです。図面やイラストだけでは商売にならないんですよ。実際に試作品をいくつか作って吟味することが必要ですし、それに顧客に渡すサンプルだって相当な数必要なんです」

と、懇願口調の私。

「技術的なことは私には皆目わかりません。しかしどうもこの製品は、開発した方の思い込みばかりが先行しているような感じがするんです。実際にこれらの商品の販売を扱う業界のプロが見て、製品ではなく、流通に乗る『商品』だと認めてもらって初めて、製品は生命を得るんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか？」

二百万円の融資をめぐる二人の議論が続く。

支店長は続ける。

「確かに担保も提供していただけるようですし、保証人もしっかりしておられる。本店も当支店の融資課長もOKを出しています。」

しかし、私はどうも不安を感じるんです。差し出がましいとお思いかも知れませんが、いくらいい製品でも販売先の見通しが十分でない新製品に我々が安易に融資させていただいで、万一、思惑（おもわく）が外れた時に一番お困りになるのは融資先、つまり貴方です。もう一度資料を持って、販売先を回ってみていただけませんか。一社でもいい、製品一つでもいいですから、買ってやろうという会社があれば、お望み通り、今回のご融資を実行させていただきます。」

「支店長、今の時期、特別に金融が引き締まっているわけではないですね。それにこれまでお宅の銀行へご迷惑をおかけしたことは一度も無いはずですよ。私の出来る範囲のご協力はさせてもらっているはずですよ。」

不機嫌な表情に変わっていくのが自分でもわかる。

息子ほどの年令の私にむかって、S支店長は顧客への礼儀を失しないように、言葉を選び選び答えた。

「ご融資した資金の保全ばかりを考えることが銀行の仕事ではないんです。私たちの仕事は一生懸命事業に携わっておられる会社を、陰で応援させていただくことです。その会社の事業がうまくいったら収益を預金していただくことが出来ます。従業員のボーナスもお預かりできる。そしてまた、必要な資金を融資させていただく、という好循環を作るための、いわば裏方の仕事なんです。融資先の事業が堅実に成長していただくことが私どもの楽しみでもありますし、生きがいでもあるんです。今回の二百万円というお金は決して大きな金額とは思いませんが、たとえ二十万円の案件でも同じことを申し上げると思います。結果は何とも言えませんが、よろしければ私が以前の支店でお取り引き頂いたことがある会社へご同道して、この製品の取り扱いをお願いしてみたいと思います。」

それからしばらくのやり取りのち、しびれを切らした私は、蹴（け）るように応接椅子を立ち、それきりその支店長と話すことはなかった。

なんとか資金を調達した私は、勇躍、その製品の生産にとりかかった。結果は在庫の山であった。商品を誉めてくれた商社の担当者も、いざとなると言を左右にして発注を渋った。日本の複雑な流通機構のなかで、その製品の末端での販売価格は現実を離れたものとなった。

開発者、製造者の一人よがりな思い入れは顧客の支持を得られないまま、幻（まぼろし）と消えた。

その慧眼（けいがん）もさることながら、血気に逸（はや）る私を諫（いさ）め、銀行員としての信念を毅然と語ったS支店長のその時の言葉を、私はその後の仕事の折々に思い起こした。

それから十年ののち。

S支店長の数代のちの支店長が私の部屋を訪れた。

才気と活力が体じゅうにみなぎり、見るからに働き盛りの銀行員としての自信を感じさせる四十代の支店長は滔々（とうとう）と自説を語り、私に土地購入と巨額の借り入れを勧めた。

「日に日に土地の値段が上がっているのはご存じでしょうか。なんととっても平地の少ない島国の日本は、まだまだ土地が不足してるんですよ。」

『土地』ならまず確実ですし、新聞などでも言われているように、来年は少なくとも二十%は値上がりしているでしょう。評論家の先生などは、今に倍になるなんて仰ってますよ。」

「しかし支店長、今はうちの工場にも余裕がありますし、活用する計画がないままに土地を買うのはどうもおかしな話ではないですか？ 農家のように農地さえあれば作物が獲れるという仕事でもないわけですから。世間は財テクとかで騒いでいますが、私は土地取り引きなど素人ですし、将来の目的のはっきりしない何億ものお金を借り入れるなんて恐いですよ。」

その支店長は二度、三度と私の部屋を訪れた。

「資金の方はお任せください。今回おすすめる土地はわずか億ですし、転売などはすべて当行の関連会社が責任をもって手配させていただきます。税金などを差し引いても今なら %の利益になります。失礼ですが、御社の今の事業収益とは比較にならないくらいの額になりますね。」

バブルがすでに絶頂期を過ぎようとしていた頃の、全国いたるところで見られたであろう異様な光景であった。

日本国じゅうにすさまじいポリウームの黄金幻想が出現した。人間の本能的な恐れや故事の教えも麻痺させる、おびただしい量の報道や流言蜚語（りゅうげんひご）に乗って、あらゆる階層を巻き込んだ挙国一致のマネーゲームが展開された。

災禍がアジア、西太平洋諸国にまでおよび、千万の犠牲者と無数の破壊を生んだ太平洋戦争もまた、異を唱える者を国あげて異端、非国民と誹謗（ひぼう）し、一億一心となって猛進したあげく、ついには惨憺たる敗戦を迎えた。

余りにも大きな犠牲を払いながら、
「なぜだったのか？」

という素朴な検証と内省はないがしろにしたまま、人々はその後の加速度的な経済の発展に目を奪われていった。

敗戦の折り、日本国民あげて味わった無力感、将来への暗然とした不安と同種のものを、いまの深刻な社会状況のなかに垣間見ることができるといえる。

時代背景の違いがあるとはいえ、際立って異なる二人の銀行支店長の精神の純度。日々、年々、刻々と重ねられる歴史は、機械的に作られるものではなく、人びとの膨大な量の日常の些細な営みや思いが、朽ちていく落葉のように重なるなかに生まれていくものであることを、今の日本の状況のなかで感じている。

*

「Yさん、きのう、あなたの名前でウチの会社へ 十万円銀行振込みがあったけど、あれなに？」

「ああ、あれはねえ、以前僕が担当してたお宅との仕事で、お宅の会社からの請求をウチの会社の都合で支払えんかったことがあるでしょ？ あの件の精算なんすよ。」

「ああ、あれかあ。でもあれは、ウチの会社にも責任があることじゃし、担当者と相談して値引きのつもりで請求は放棄して、とうにうちの帳簿からも消しとったんじゃない」
「いやあ、あれは全部僕の不手際じゃったんよ。お宅とのいきさつを会社の偉いさんにも話して、随分掛けおつてみたんじゃないけど、理解してもらえなかった。まあそれで、今度会社を辞めたのをきっかけに、僕個人のお金をお宅へ振り込んだわけなんよ。受け取つてよ
お」

「いや、そういうわけにゃあいかん。ウチの会社はあんたの会社と取り引きしたわけで、あんた個人と取り引きしとったわけじゃあない。あんたの月給のひと月分以上にもなるようなお金を、担当者のあんた個人から貰うなんて、そりゃあ筋違いじゃ。冗談じゃない」

「まあ、ええじゃない。退職金ももろうたことだし、それで僕の気がすむんだし。お宅に迷惑をかけたまま会社を辞めたら、いつまで経つても前の仕事が終わってないような気になるしねえ。会社辞めたとはいっても、自分のやった仕事にやあ今でも責任があると思うとる。すつきりした気分で、次の仕事を探したいんよ。長い付き合いじゃない、僕の気持ち、わかつてよお」

私と、ある機械商社を辞めた直後のYさんとのやりとりである。

打算と駆け引きが日常交差するビジネスの世界で、このような鳥肌立つような感激を味わうことが出来たのは、私にとって絶後のことである。

彼の思いを預かり、いつか事あればYさんのためにどの手にかけても、と私は強く思った。

彼とのやりとりのあと、私は亡くなった祖母のことを思った。

私の母方の祖母は明治十七年、山口県玖珂（くが）郡に生まれた。祖母の母親、つまり私の曾祖母は江戸期の生まれである。

祖母は武家の血筋をひくことを誇りにし、気位の高い女性であった。アルバムに残る写真を取り出して見ると、背筋を凜（りん）と伸ばし、挑むようにやや斜めに肩をいからせた祖母の短軀を見ることが出来る。

西暦一六〇〇年の関が原の合戦で徳川軍に破れた毛利氏は、それまで百二十万石を誇った中国路の覇者からわずかに三十万石の小禄に減封され、長州（現 山口県）萩の小城に押し込まれた。

主君を慕って萩に付き従ってきた多くの家臣を、三十万石という少ない禄高ではとうてい養うことはできなかった。家臣は武士から商人や農夫に姿を変えて藩内の各地に散ったが、武士の誇りと矜持（きょうじ）は忘れることはなく、その思想を連々と子孫に伝えた。

長州における産業の三白（さんぱく）といわれる、塩、蠟（ろう）、そして紙。公称三十万石という禄高はこれらの特産物をはじめとした殖産のおかげで、長州藩晩期の今というGDPは実質数百万石といわれ、その活力が、幕末、明治維新の世に、徳川幕府に正面から立ち向かう一原動力となつたともいわれている。

祖母は成長ののち、紙作りの商家に嫁いだ。上質紙の原料となる楮（こうぞ）やミツマタを育て、広島県と山口県の県境を流れる小瀬川の豊富な清流で紙を漉（す）いた。

日露戦争に出役し傷痍軍人となつた夫をかかえて、馴れない商いで七人の子供を育てた祖母は、常にふんだんな食事を子供たちに与えることを最重要視して、心を砕いた。幼心に「食」に不自由させないことが、単純にして必要な教育手段と考えたのである。

たとえ衣服は粗末であっても、幼時に食が満ち足りてさえおれば、長じたのち、理に反して必要以上のものを専有しようとする邪（よこしま）な考えに陥（おちい）らない。また、自分の持てるものを屈託なく他に与えようとする余裕が育つ。

とりわけ男子に対しては「武士は食わねど高楊子」たることを求め、「男は臍（へそ）とはいわれても、口とはいわれるな」と日常のなかで強く戒（いまし）めた。

臍とは女性関係。女にだらしないと周囲に言われることはあっても、口、すなわち、食、酒、に卑しい男と言われることを激しく嫌悪したのである。

卑しく「ただ酒」を呑むことが権威、権力への媚（こ）びや迎合、まいない（賄賂）の受領につながり、ついには男子の命ともいうべき誇りや職を汚してしまう、という発想である。

飽食の現代と異なり、明治期から大正、昭和期にかけて七人の子供達の食欲を過不足なく充たすことは、並大抵のことではなかったに違いない。

兵役を誉れとする夫に従って、祖母は夫に続いて三人の男子を戦地へ見送り、一人を戦傷によって失っている。

晩年の祖母の表情は昔の苦労などなかったように、いつも駈蕩（たいとう）（たいとう）としてのどかだった。彼女の作る料理は決して華美なものではなかったが、ふんだんな思いのこもった素晴らしい食事だった。

冒頭に紹介した機械商社のYさんは会社を退職したのち、造形の特技を生かして樹脂の成型会社を興した。

清廉（せいれん）で駆け引きのない仕事ぶりから、創業直後から彼の会社を名指しする顧客に支えられて、順調裏に今日に至っている。

体じゅうがユーモアに包まれ、「我欲」のない彼のもとにおのずと良質な情報が集まってくることは言うまでもない。

私の周囲に目を凝らせば、武士（もののふ）の魂にも通じるたたずまいを感じさせる多くの人物がいる。

国家公務員のAさん。大学教員のBさん。会社役員のかさん。議会の議員を務めるDさん。会社員のEさん。音楽家のFさん、

敬愛するこれら友人知人先輩諸氏はその稀に個性的な生き方から、現代社会においてはユニークな少数者と呼ばれる存在なのかも知れない。

しかし私は、彼らが長い試練のなかで養い到（いた）った意思や、拳措（きよそ）の端々に、彼らの体に何代にもわたって受け継がれた伝統的日本の魂を感じることがある。

それは現代の国際社会においても、立派に通用する普遍的な精神であるように思う。

彼らは特別、気負った様子はなく自然体で、口に出して語ることはない理想を夢見ながら、悠々と人生を楽しもうとしているように見える。

彼らのような人物が日本の社会層のなかで有効に存在し、精神を周囲に伝える限り、日本は将来にわたって、少なくともこのたびの不況程度で微動もすることはないと思っている。

了